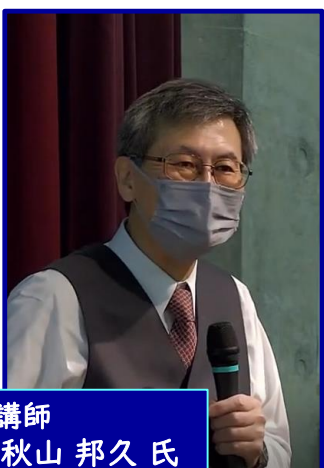


## 子育て・家庭教育相談担当者研修会 II

職員研修
有志指導者研修
要請研修

問題（発達障がい）を抱えている家族に応じた支援の在り方について学び、相談員や支援者としての対応力を高めることを目的として実施しました。講義と事例研究を通して、「個の問題に応じた家族支援の在り方～発達障がい～」を中心に学びました。



講師  
秋山 邦久 氏

### 【講義】 「個の問題に応じた家族支援の在り方



～「発達障がい」を中心に～

「人と関わる時は、優しさや誠意と思いやりでということが普通の人の先入観としてありますが、発達障がいの方に対して、このような情で関わろうとすると、こっちが傷付いてしまうことがあります」という話から講義が始まりました。「今までの研修は、視点（発達特性のある子の特徴や注意点）、広い視野（そういう子もいるんだという認識）を持って関わるようにということが中心で、具体的にどう関わったらいいかという話が少なかった。視点や視野だけでなく、視座（文脈）を変えてみることで、相手の文脈（世界）に合わせて支援をするということが大事になってくる」という話に、「目から鱗が落ちた」との感想が多くありました。



会場参集

### 【事例研究】

#### 「事例で学ぶ個の問題に応じた家族支援の在り方」

「参加の皆さんの中から寄せられた事例や質問それぞれの中に、支援のポイントや何かプラスに考えられるものがあるかもしれない」という視点で見ることについて、先生から次のようなことを教えていただきました。  
●餅は餅屋。自分たちの役割をしっかりと果たす。他の守備範囲までやろうとするから苦しくなる。

- 子どもの発達を、点（目の前の現状）でなく線（未来の姿）で見る。線をつないで面にして、将来を見立てる。
- 遊びの要素を入れてルール化・ゲーム化することで環境を調整する。（しかけ学）
- 見本を見せる、モデルを提示する、お手伝い（プロンプト）をする。
- トークンエコノミーによる行動プログラムを作って、ご褒美（褒めを含む）をあげながら、訓練を続けていくと、トークンを自分で作れるようになっていく。それは、自己コントロールにつながる。
- 対応方法が1つしかない、それがダメな時に苦しくなるので、リソースノート（対応方法の蓄積）を作っておくとよい。等々、対象者やその家族に関わる方々が、明日からの支援を見直す機会となった時間でした。

### 《受講者の声》



- ・「寄り添い」や「見守り」は、その場をやり過ごすことでではなく、支援ではないと言われ、はっとさせられました。
- ・全ての子どもたちに、共感・受容・寄り添いながら関わる大切だと思っていたが、発達に特性のある子ども達には、うまくいかないということがよくわかりました。
- ・今後の関り次第では子どもの困難な状況が変わっていくのではないかと、自分の関わりを見直すきっかけとなりました。子どもを点で見ずに線で見ていこうと先生が何度もおっしゃっていました。改めて視点を確認できたように思います。目の前にいる子どもの中に原石を見つけてあげたいです。

### 《受講者の評価》



A（有意義）	98.6%
B（どちらかといえば有意義）	1.4%
C（どちらかといえば有意義でない）	0%
D（有意義でない）	0%

### 《担当者（佐々木）から》

会場参集とオンラインのハイブリッド研修会での実施としたこともあり、子育て・家庭教育に携わる多くの関係者に参加いただきました。秋山先生の話を知ると、日々対応に苦慮していることが解決に向かう、そんな気持ちになります。発達を特性を理解した支援をする（受ける）ことで、お互いが幸せになるのだと思います。